＜太平洋に勝つために＞　２０００年１０月２１歳

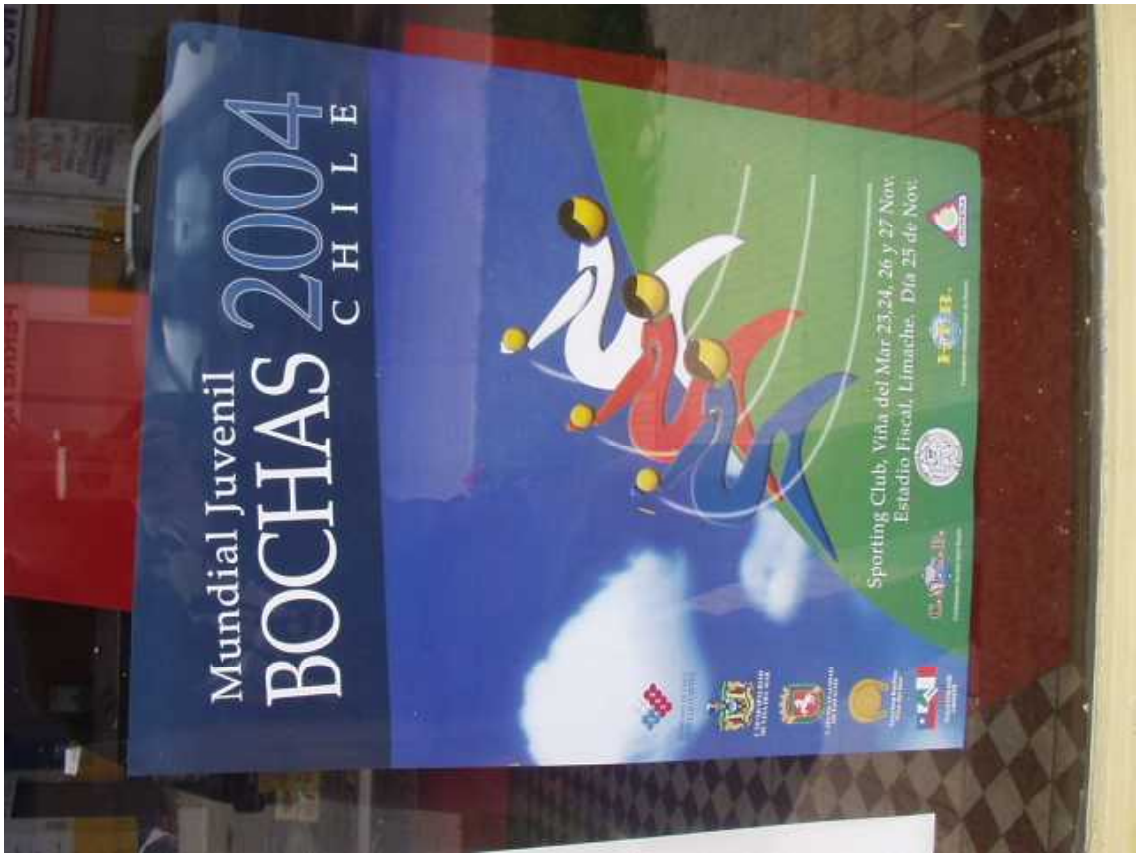
２１歳の時に見た太平洋、あまりにも大きく、あまりにも深く、あまりにも遠く、あまりにも広く感じた。
それは、あまりに世の中を知らないと気付いた自分。自分の小ささを思い知ったとともにもっと成長し、もっと大きな男になりたいと誓った日でもあった。
３０歳になった時もう一度この海を見にこよう。
そして絶対小さいと思えるようになりたい。
この想いが僕の２０代を支えていた。
そう太平洋に勝つ事が僕の２０代の夢となったのだ。
人は心の奥で自分には無理だ。と思う時がある。
でも心の支えを持つ者はその弱い自分を打破できる。弱さを克服する動機があるからだ。
その打破一つ、一つが積み重なり、心の成長となるのである。
太平洋に勝つと決めた２１歳の自分が予想した２０代とはどんな世界になるんだろう。
３０歳の世界選手権後に僕は太平洋をもう一度見にこようと心に決めた。
僕は太平洋に勝てるのだろうか？そんな思いをのせて僕の２０代が始まった。
スポールブールと共に。

＜前書き＞

マイナースポーツをやっていて、よく問われる事がある。
何故マイナースポーツをやるのか？やっていて意味があるのか？
本当に面白いのか？最初は僕も意味なんか見つけ出せなかった。
でも、スポールブールとの出会いは確実に僕の人生を変えていった。
スポールブールを通して世界中を訪れた。世界中を訪れると世界中の人と知り合えた。
世界中の人と知り合えたら、その人達を知りたくなり、会話がしたくなった。
語学を習得したら、その人達からその国の歴史、文化を聞けるようになった。
そして人脈も広がって行き僕の可能性も広がっていった。
その人脈を生かして僕は世界に飛び出した。
僕に答えを求めた人達も、このモノガタリをみてもらえれば少しは意味が分かるかもしれない。あてて言おう。マイナースポーツはやっている人が少ないからマイナースポーツと言われる。だったら誰かがやるしかない。その誰かを僕がやる。それだけだ。できあがっていない環境を作れるのがマイナースポーツの魅力だ。
ボール一つの力で世界中から選手が集まる。
そしてその舞台で最高の結果を出すために自分自身を成長させていく。
スポールブールとの出会いは技術、体力もそうだが人間としての心を鍛える大きなきっかけとなっていった。

＜チリ遠征＞２００４年１１月　２５歳

世界選手権フランスニース大会から早一年が経っていた。
それは同時に２年に一回行われる世界選手権が後１年後に迫っている事を表していた。
前回は初めて体験する世界選手権、初めて見る世界プレイヤー、そしてその中にいる日本代表の私、参加する事で満足を得られていた。
この大会以降はもっと世界のプレイヤーを見てみたい、もっと世界中の環境を見てみたいという欲望へと変わっていった。
欲望がでた時に、行動に移せるのか？
移せれないかでは人生において大きな違いがでてくる。
そして、その行動で実を咲かせられるか？
欲望は満たされれば満たされるほどまた大きな別の欲望が沸いてくる。
僕はそのもっと世界プレイヤーを見たいという欲望を基にＵ１８、Ｕ２３世界選手権が行われているチリのビーニャデルマールに飛んだ。
全くスペイン語を勉強した事がない状況だったが、無知は時には最大の武器となる事も知っていた。自分が無知である事を知っていた分、何にでも興味が持てた。
日本からカナダ、カナダからチリと１８時間かけてようやく辿り着いた。
日本から裏側の地、果たして本当に大会は開催されているのだろうか？
チリのビーニャデルマーレで開催しているという事しか情報がない状況で会場に辿りつけるのだろうか？
旅の始まりはいつも心配から始まる。不安があるから旅なのだ。
スポーツと歴史は密接な関わりがある。
ヨーロッパ人の大陸移動、イタリア移民、言語、食文化、
それは歴史と言語、食と同じように文化として成り立っているからだと思う。
スポールブールファミリーは温かかった。地球の裏側から来た、言葉の話せない日本人を家族のように迎えてくれた。早速、日本人安宿バックパーカーから４つ星ホテルへ移動、チリ代表チームと同じ部屋になる。食事も選手と一緒に食べる事になり、自食生活から一気に飲み放題食べ放題へ。そして送り迎えも始まった。
試合が終わると毎日のように観光スポットへ連れて行ってくれる。
英語とスペイン語を話せる人からスペイン語を教わった。
ほんの３日前までは日本にいて本当に辿りつけるのだろうかという不安が一気に安心へと変わった瞬間でもあった。
試合では地元チリがダブルスでフランスを破る大波乱。
ラピットでは世界新記録がでるなど会場は大盛り上がりだった。


Mundial Juvenil
BOCHAS 2004
CHILE
Sporting Club, Viña del Mar 23,24, 26 y 27 Nov.
Estadio Fiscal, Limache. Día 25 de Nov.

＊＊＊

＜ペルー遠征＞

日本からカナダ、そして南米へ、チリ、アルゼンチン、ブラジル、ボリビアと渡ってきた僕がこの旅最後に選んだのがペルーだった。

●アルフレード・チャベス
ペルーを語るにおいてこの男の名前は外せない。
アルフレード・チャベス。
この男との出会いは前回世界大会のニース大会。
ラテン系の陽気なノリとスペイン語が話せなかったためノリで会話するしかなかった僕と、波長がぴったりあった。
アルフレードからいろいろなスペイン語を教わってはそれを使用していく僕。
ただそれはとれも日本語では声に出せないような言葉だらけだった。
そんなアルフレード・チャベスは今回の大会は監督として参加していた。
試合が終わりそっと後ろからアルフレードの肩を触る。
そっと振り返るアルフレード・チェベスの顔、僕とあった瞬間に驚きの顔に変わる。
SOOOOOOO！！！！！！！！！！！
といきなり抱きついてくるアルフレード・チェベス。
本当に愛すべき男だ。
そして念願のアルフレード・チャベス宅訪問。
１年前の世界大会であった人の家、しかも日本の裏側の場所にまでお邪魔するとは当時の僕は想像もしていなかった。

毎日僕が泊まっている安宿まで車で迎えに来てくれて、各クラブに連れて行ってもらった。
ありがたい事に食事もすべて奢ってもらった。
あまりにも毎日僕に付き合ってくれるので、アルフレードに仕事は何をしているの？聞くと、スポールブールだと答える。
多分スペイン語の聞き方が間違えただろうと何度も聞いてもスポールブールと答える。
どうやら本当に仕事として成り立っているらしい。
オフィスに連れて行ってもらうと、確かに日本の国立競技場みたいな所に色々なスポーツの事務所があってスポールブールもその一つとして扱われていた。
おそらく国からのサポートで仕事として成り立っているのだろう。
それかアルフレード・チャベスの奥さんがアボガド（スペイン語で弁護士）なので、
その収入が主な家族収入なのか？
同じように仕事はスポールブールだと言い張るニースであったビットゥ、
彼が嬉しそうに見せてきた腕のタトゥー。なんか見覚えがある。

そこには感じで美突と書かれていた。
そういえば１年前にビットゥに俺の名前を漢字で書いてくれって言われたなあ。
まさかその時何気なく書いた当て字が体に刻まれるとは思いもしなかった。

＊＊
今回の旅では、監督、選手の家に行き家族を紹介してもらったり、過去の写真を見せてもらった。そんな写真の中に興味深い写真があった。
前回のニース大会の最終日にペルーの部屋を訪れた時、この大会で仲良くなったペルーとモーリシャスとの合同写真をとった。
裸で写真をとってくれようとしているペルー代表プレジデントレオの姿がおかしく僕も同時にシャッターを押した。その時とった僕の写真は僕のお気に入りの写真でもある。
その時の写真がペルーの大事にレオの家に飾られていたのである。
同じ瞬間にとった写真がペルーと日本に存在するのは少し、趣き深い気がする。

そんな夢の日々も僕のフライトが近づくにつれて終わりを迎えていた。
最終日にペルー代表が僕に一つのメダルを贈呈してくれた。
そこにはアルフレード・チャベス、プレシジョン、南米大会２位と刻まれていた銀メダルだった。彼は思い出の品を僕に渡してくれたのである。
硬く抱き合い再開を約束した僕ら。

次に会うのは１年後のトリノでの世界選手権になるだろう。
僕はこの南米の旅を一生忘れる事はないだろう。
そしていつかアルフレード・チャベスを日本に招待して、
接待のお返しをしなきゃ。
『トリノで会おう。そう言って僕らは別れた。』
＊＊＊

＜ウガンダ遠征＞　２００５年３月

アフリカにスポールブールを普及させよう、その思いの元僕はアフリカのウガンダへ飛んだ。
その途中エジプトを経由してギザのピラミッド横で水タバコを吸いながらスポールブールの練習をした。
ピラミッドを見ながらの練習は最初で最後になるだろうか・・・

そしてウガンダ入り。

実はアフリカの旧フランス植民地はスポールブール強豪国である。
チュニジア、アルジェリア、モロッコ等は多くの移民がフランスでプレーしていると共に、フランス人が自国にブールを持ちこんだので至るところにコートがある。

でもやはりウダンダではみんなスポーツをやる余裕なんかない。
僕がお世話になった小学校では、校庭に新しく建てたサッカーゴールが１日で盗まれたという程の治安の悪さ。
でもそんな中で行ったスポールブール普及活動は大成功に終わった。

＜日本選手権＞　２００５年５月　２６歳

ニースから早１年半が経ち２年に一度の世界選手権が近づいていた。
前回出場したのはプログレッシブとラピットのみ。
なんとか実力をつけて他競技も出場したいと必死に練習してきた日々だった。
そして、世界選手権出場をかけて全日本選手権が始まった。
もし負ければ世界選手権に出場さえもできない状況だ。
そんな状況の中で、日本選手権コンビネが始まった。
●試合
この日僕はいつも以上の調子を維持していた。
相手も調子が良かった事も集中力を維持できた要因だろう。
スポーツにおいて記録を伸ばすのは環境だといわれる。
いいコーチ、いい練習環境もそうだが、一番いい事はライバルがいるという事だろう。
ライバルとはお互いが刺激になれる存在。
そんなライバルがいたからこそ、この記録がだせた。
この日僕は、日本選手権でコンビネ１８点という日本新記録を樹立したのであった。
結局僕はこの大会、コンビネとプログレッシブ、ラッピトと３種目で日本一の座を勝ち取り、世界選手権出場を決めた。
＊＊＊
日本記録を持つのは大変なことだ。
プログレッシブの世界記録保持者はフランスのセバスチャン、
５１球投げて５１球ヒットというから神業としか言いようがない。
記録を出したのが２００４年。その後交通事故で膝をいためプログレッシブはできなくなってしまったが、それから５年の月日が流れている今も世界中で世界チャンピョンとして語り告がれている。
そう記録は破られるまで一生残る事になる。
それは年代を超えて勝負ができる嬉しさでもある。
１００年後僕の記録は残っているのだろうか？
いやこの記録を破るような選手を自分が育てないといけない。
記録は破られるために存在するのだ。
自分が現役である限り日本記録を更新し続けていきたい。
そして未来の選手と闘いたい。
過去の記録が簡単に破られたんじゃつまらない。
この日以降僕は日本記録を常に意識するようになっていった。
＊＊＊

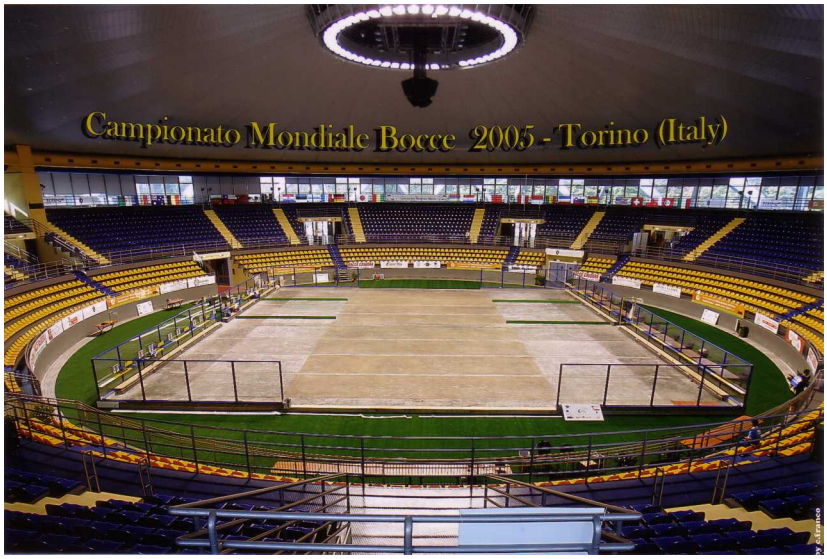
＜世界選手権トリノ＞　２００５年１０月

前回の世界選手権から早２年、参加で満足していた前回大会から今回は結果を残す大会。
日本人初の予選突破が最大の目標だった。
今回の大会では監督から日本代表エースと任命され全６種目中４種目に出場した。
半年前の日本選手権で日本記録を記録したコンビネ、
前回大会同様メイン種目のプログレッシブとラピット、
そして初のトラディショナル種目となるダブルスでの出場だ。
一番の期待はコンビネ。
半年前の試合では日本新記録をだして十分世界と戦えるスコアまで成長した。

開会式が終わった後に、すぐにプログレッシブの試合が始まった。

僕の出番までまだ時間がある。
僕はスタジアムからでて周りを走る事にした。
途中、いろいろな国の選手とすれ違った。
この記録の世界記録保持者であるフランスのセバスチャン、
前回大会の世界チャンピョンである地元イタリアのジラルド、
早々たる顔ぶれの中に僕がいた。
外はもう真っ暗だった。
スタジアムはすでに試合が始まっていて歓声と音楽で包まれている。
それと正反対にスタジアムから少し離れた所は虫の鳴き声さえ聞こえる静けさだ。
僕はその暗闇の中ですっと目を閉じた。
後数十分後には結果がでているだろう。
プログレッシブという競技はたった５分で全てが決まる。
短いようで長い５分間。
また２年に一回の世界選手権がたった５分の結果で決まってしまうのだ。
あまりにも重い５分間。
それだからこそその５分のために全てを注ぐ価値もある。

このトリノでの５分間は当時の僕にとっては上出来の結果だった。
１９点という記録は前回大会の記録を上回り、
出場選手中９位という成績だった。
『よくやった』
そんな言葉をかけてくれた監督の笑顔が忘れられない。



プログレッシブが終わり、とうとうコンビネが始まった。
今回最大の目標、予選突破をかけて・・・
ブロックはモロッコとモーリシャスと同グループとなった。通常４チーム中２チームが予選突破となるが。このグループは３チームのみなので、可能性は高い。
２年に１度の世界選手権においてはクジ運も勝負に含まれるのだ。

■コンビネ　（VS モロッコ）
●試合
モロッコの選手は独特のフォームからティールを投げる、その姿はまるで神に祈るような美しさだ。独特なフォームでリズムとタイミングを計っているのだろう。
そして、なんと彼は４年前のこの種目の世界チャンピョンだ。
メイン会場から少し離れたサブ会場で行われた試合だったが、
なんと試合をしているのは僕らだけ。
そうこの会場にいる１００名以上のお客さんは僕らを見に来ているのであった。
下手な試合はできない。
その気持ちとは裏腹にティールが当たらない。
監督からはポワンティを入れていけば相手も焦ってティールを外すはずだと的確なアドバイスを頂いたが、点差は開く一方だった。
元世界チャンピョンと戦って思った事は、彼はけして格下の僕相手でも手を抜かなかった。
少しでも隙があれば負けるかもしれないと思っていたのだろう。
点差が離れるにつれて向こうがリラックスしてきているのが分かった。
完全に向こうのペースの試合だった。
点差が思った以上に離れなければ向こうも焦り、隙ができたかもしれない。
でも隙さえもこじ開ける事ができなかった。
なかなか当たらなかったティールがやっと当たった時、
会場から割れんばかりの拍手がなった。
ありがたいと思ったのと同時に安心感を感じた。
しかしそれ以上にこんな実力じゃないのに・・・
と悔しさが溢れた試合だった。
１０－２２　僕のベストスコアーから大きく離れた点数だった。
僕は元世界チャンピョンの前に破れさった。試合会場から離れる時、ふと思った事がある。
世界チャンピョンと戦えた喜びだ。
どんなスポーツでも世界チャンピョンは存在する。
でも世界チャンピョンと戦える機会がある人はそうは多くないはずだ。
このことを僕は誇りに思った。
でも戦う事で満足する事はこれで最後にしよう。
次は隙をこじ開けるぞ。そう心に強く決めた。
世界チャンピョンと対決して僕はまた一つ成長する事ができた。
試合中、鬼のような顔をしていた元世界チャンピョンが、試合終了後笑顔で握手を求めてきた。彼も人の子だったのだ。

■コンビネ（VS モーリシャス）
●試合
前回大会に参加していたラージとラムが送りこんだ刺客が１週間前にベルギーで行われたペタンク世界選手権のモーリシャス代表だ。
僕とモーリシャス、勝った方が予選突破となる。
期待と不安が僕の心を占める中、入念なウォーミングアップをはじめる。
普段の力を発揮すれば普通に勝てる相手だ。
試合開始前２０分前から各チームがコートでウォーミングアップを始めているのだが、
何故かモーリシャスの姿がない・・・
試合会場を間違えているのか？
それとも世界チャンピョンと対決した僕に恐れているのか？
結局試合開始１分前にようやくモーリシャスの選手が現れた。
なんと余裕な態度だ。僕相手にウォーミングアップなど必要ないということなのか？
それとも究極の心理作戦なのか？
ようやく僕の前に現れたモーリシャス代表は一言僕にこう言った。
HE　IS　SICK。YOU　WIN。
どうやら僕の対戦相手は病気になってホテルで寝込んでいるらしい。
なにはともあれこれで日本チーム初の予選突破が確定した瞬間だった。
■コンビネ（VS イタリア）
●試合
ベスト８をかけて戦う相手はなんと地元イタリア選手。
彼のフォームはまるで戦車のように力強く、相手を威圧するフォームだ。
彼のティールが当たるたびに会場から拍手が沸く。
同じ時間に８試合同時にやっているのだが、どうやらお客さんが注目しているのは
僕らの試合のようだ。
試合は随時イタリアのペースで進んでいく。
途中イタリアの監督が突然タイムアウトをとった。とうとう隙をこじ開けたか？
と思ったら何やら審判を呼んで講義している様子。
コンビネはティールとポワンテを両選手で交互に繰り返していく競技。
グランド状況の公平さを考えて４、５メーヌは交代しないで同じ方法でやらなければならない。しかし、僕もイタリア選手も気付かず交代してやってしまっていたのであった。
イタリア選手でもそんな勘違いをする事もあるのか？
しかしそんな状況をお構いなしにどんどん点数を上げていくイタリア選手。
結局僕は９－２３という大差でイタリアに敗れ去った。
それと同時に僕のコンビネの世界選手権が終了した。
日本人初の予選突破は果たしたが、ベスト１６という結果に心から満足ができなかった。

プログレッシブ、ラピット、コンビネが終了し、残るはトラディショナル種目のダブルスのみとなった。オーストラリア、ブルガリアと同グループとなった。

■ダブルス（VS オーストラリア）
●試合
前ニース大会ダブルス銅メダルのオーストラリアとの予選突破かけての対戦が
始まった。
序盤日本は５対０と最高のスタートをきった。１３点先取か、もしくは　二時間以内で多く点をとったチームが勝利する。
正直五対０となったとき勝ちをどこかで意識してしまっただろう。
オーストラアチームは空かさずタイムアウトをして選手を交替した。
そこで一気に流れが変わった。
スポーツでいう流れとはサラリーマンでいう残業時の雰囲気に似ているかもしれない。
流れが悪くなると自分のペースが崩れ気分が崩れ、体のバランスも崩れる。
そんな状況が続いて気がついたら二時間前で１０対５と逆転されていた。
日本代表はとうとう追い込まれあと僕の一球を残こすのみとなった。
このゲームには一点をとりに行く球を転がす作戦と複数点をとりにいく球を投げる作戦がある。
最後の一球僕は負けを感じてしまったのか球を転がす作戦を無条件で選んでいた。

試合は結果１３対５の完敗だった。

試合後にオーストラリの選手が僕にこう言った。
なぜあの場面で球を投げる作戦をしなかったんだ。
もし、球を投げて成功し私達が残りの球を転がす作戦で全て外したとしたら同点だっただろ。
試合が終わる最後までどうすれば勝てるのかを考え実行すれば必ず君達は強くなる。
衝撃的な言葉だった。もちろん日本が成功しオーストラリアがミスをし続ける可能性は１パーセントにもみたない。
でも何故自分で流れを変えようとしなかったのが悔やまれた。
勝つか負けるかは試合が終わった後に感じよう。
試合中はあくまで勝つためには何が最適かを考えつづけよう。

僕はまたスポーツを通じて一つ教えられた。

■ダブルス（VS ブルガリア）
●試合
予選突破をかけて闘ったダブルス２試合目。相手はけして強豪とはいえないブルガリアだ。
この試合で勝った方が予選突破となる重要な試合。
最初僕のポワンテが決まり、３－０と好スタートをきった。
前回のオーストラリア戦のこともあり、これからが勝負だと、感じていた。
しかし肝心なティールが当たらない。もし当たれば大量得点を稼げる場面でも痛恨のミス。
終わってみれば３－１３と惨敗だった。『悔しいだろ』監督が僕に言った。
この試合は勝てる試合だった。ただ自分のミスが続き負けた試合だった。
『はい』少し涙目で答えた僕がいた。
何とか勝ちたいという強い想いの裏腹で、何にもできない悔しさが身にしみたのだ。

スポーツを通して人はどんな時に涙を流すのだろう。
僕の中の経験では中学生の時の野球部で最後の試合で負けた瞬間に自然と涙がでてきた。
高校の野球部でも先輩が最後の試合で負けた時、泣きながらお世話になったなと言ってくれ、僕も泣いた。

スポーツを通して涙を流したのはそれ以来だった。

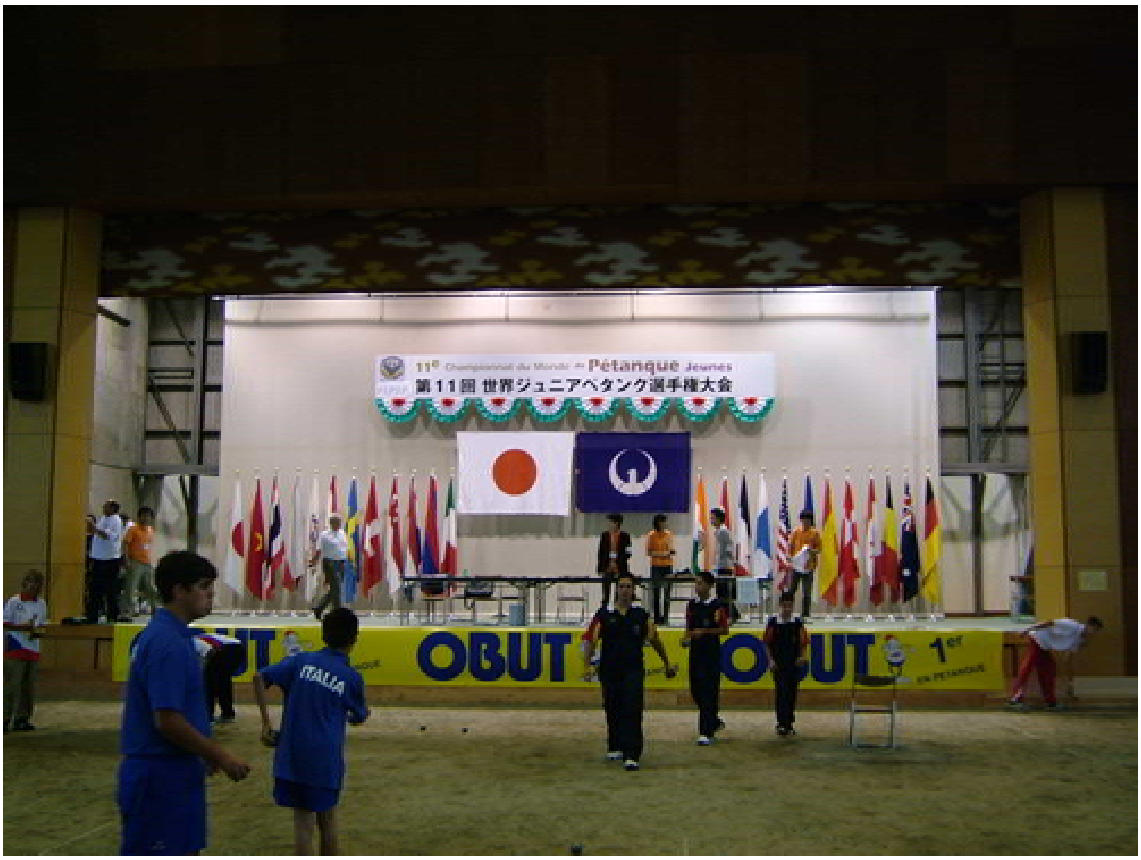
＊＊＊
２年に一度の世界選手権が終わった。
この瞬間に肩の荷がおりる。
緊張の日々から解きはなたれる。
一日一日が長く感じた日々から、日本に戻り平凡な毎日が始まる。
本当に僕は日本代表として闘ったのだろうか？
そんな疑問さえも浮かんでくる。
そんな時、世界選手権で流れていた音楽を聴くと、その時の気持ちを思い出してきて興奮してくる。
体が覚えているのだろう。
２年に一度の世界選手権は本当に僕の人生にとって大切な時間となっていた。
たった１週間だが、それが何年のようにも感じる。
そんな時を持てる事に感謝したい。
＊＊＊

＜Ｕ１８ペタンク世界選手権日本開催＞　２００６年７月

日本でなんとペタンクのＵ１８世界選手権が開催されることになった。
アジア選手権も開催した事がある実績もあり、初めての国際大会ではないにしろ、
初めての世界大会開催である。初めて見る世界中のペタンク選手に興奮しつつ、僕は通訳（英語とスペイン語）ボランティアで大会に参加した。

● 人物

この会場でどこかで見たことのあるフランス人と再会した。２００３年ニース世界選手権で現地であった人だ。スーパーマーケットは近くにありますか？と尋ねると、
なんとわざわざ車で連れて行ってくれた方だった。
日本語が話せる娘さんがおり、今回は通訳同行という事でこられていた。
約３年ぶりの再会が果たされた。
やっぱり人と人とは何かしらどこかで繋がっているみたいだ。
＊＊＊
この大会を通してスポールブール国際大会日本誘致という漠然とした目標ができたのも事実だ。しかしまだ、選手としてやりたいことはまだまだある。
この目標が現実となるのはまだまだ先の事だった。
＊＊＊

＊ 

＜スランプ到来＞　　２００７年１月

２００７年新しい年が始まった。今年は世界選手権の年だ。
自然と緊張が走る。自分は前回のトリノ大会後どれくらい成長できたのか？
焦る気持ちと裏腹にこの時期の僕は絶不調のどん底にいた。
フォームがバラバラどころか、どんなフォームで投げていた事すら体が覚えていなかったのだ。
僕は自分自身のフォームを再検討する事から始めた。
どんなスポーツのフォームも基本的な基礎の形があって、その後その人それぞれの体、性格に合わせて特徴がでてくる。
ボールの握り方、立つ位地、右腕、左腕の使い方、そして各指の詳細に至るまで研究したのだ。
一番念頭に入れたのが呼吸だ。

大きく右手をバックスイングして、途中止まるくらいのスピードで投げる体勢に入る僕のフォームは世界でもあまり例をみない僕独特のフォームとなっていった。

こうして僕は着々と世界選手権に備えていったのである。

＜ボスニア世界選手権日本代表選考会＞　２００７年４月

半年後に迫っていたボスニア世界選手権、それと同時にどの種目で勝負をかけるかを決める時期にやってきた。日本代表を決める選考会。どの種目にでたいかは言葉ではなく実力で決まる。そんな暗黙な了解があるため、まずは日本で結果を出さないといけない。
意見が言えるのは結果をだした者だけだ。
それはどんな世界でも言える事だ。
２度の世界選手権に出場して思った事。
今の僕が世界に一番近い種目は間違いなくプレシジョンだという事だった。
●試合
今までの最高点は何点だっただろう。恐らく１０点そこそこだったと思う。
この日の僕は集中していた。
プレシジョンという競技は集中力と確率のゲームだ。
どれだけ集中力を保ち、かつヒットするという確率を上げていくかにかかっている。
この日次々とヒットするたびにガッツポーズを上げる僕。
一発勝負のプレシジョンで、いかに最高のパフォーマンスがだせるかが勝負をわける。
一発勝負の怖さ、運も左右してくるため何かを持っている人がドラマを起こす。
その何かとは持って生まれたものなのか？
それとも努力でなんとかなるものなのか？
恐らく両方必要だと思った日でもあった。
この日、この試合で１９点という日本新記録を自立した僕は今回の世界選手権ではプレシジョンで勝負する事を心に決めた。
世界選手権で勝負する種目の決断には実績という決心が必要だった。

＜オーストラリア遠征＞　２００７年５月

世界選手権まで数ヶ月となった日本代表チームは前回のトリノで人脈を得たオーストラリア代表チームと国際交流試合を行うためにオーストラリアのメルボルンへと飛んだ。
世界選手権以外では初めての海外遠征、世界トップクラスのオーストラリアの実力は、そしてその環境はどうなっているのだろう。
高まる気持ちを抑えて僕は飛行機に乗り込んだ。

■プレシジョン
世界選手権での出場が決定しているこの種目で、僕は絶対に負けるわけにはいかなかった。
試合内容
この日僕は明らかに集中していた。
本番に強い性格は昔からあった。
いわゆるダークホースという存在だった。
何かやってくれるんじゃないか？そんな期待がいつもまわりにあった。
本番に普段以上の力をだせる選手とだせない選手の違いは何だろうか？
もちろん僕もいつも普段以上の力がだせるわけではない。
でも小学生時代のすもう大会優勝から始まり、小学生６年生で校内マラソン大会３位、中学時代には市内マラソン２位、校内１５００Ｍ走優勝、駅伝大会では区間新記録賞樹立等、８００Ｍ では県大会４位と自分の想像以上の結果が、本番に発揮できる事を知っている事実がある。それと同時に手を抜いたら負けるという事も体が覚えていた。
中学校３年生になり市内大会８００Ｍで優勝候補だった僕は少し余裕な感じだった。
しかしレースが始まるといつもより体が重い、終盤までトップをキープしていたが最後に抜かれてしまい２位となった。
そしてなんとゴール１Ｍ手前で力を緩めてしまったのである。
その瞬間後ろからきた選手が僕をかわして僕は３位で幕を閉じた。
この時の体験は今でも体に染み付いている。
走りこみの練習をしている時に、ゴール近くで勢いをとめてしまう弱い自分がいる時、あの時の悔しさを体が覚えていて、自然と力がでるのである。
人は見ず知らずのうちに経験が体に染み付いているものなのだ。

１球目は
２球目、
３球目・・・・

自分が何点で相手が何点かなんかはいちいち覚えていなかった。
ただ自分自身が全力をつくす。集中しつくす事に集中していた。
集中する事に集中するそんな体験はなかなか経験できるものではない。
１２球目、最後のボールが外れると、審判が握手を求めてきた。
『YOU　WIN』
正直、勝ち負けなんかどうでも良かった。
ただ、自分自身をオーストラリアで表現できた事が嬉しかった。

後から分かった事だが、彼は後にオーストラリアシングルチャンピョンとなり、ベストファアリスト賞を獲得する等、オーストラリア屈指のプレイヤーだったのだ。

■トリプルス
スポールブールのトラディショナルゲームにはビットティールという究極の作戦がある。
相手チームにボールがない場合はビットティールが成功すると自分のチームの残り球がそのまま点数として加算される作戦だ。
しかし、ビットは直径３CM 程、ヒットするのはなかなか難しい。
そのチャンスは直ぐにやってきた。
最初のメーヌで僕らが２球残して、相手が１点を取っている状況だった。
もしミスをして近くにある自分達のボールを当ててしまうと相手に大量得点をあげてしまう可能性もあった。
そんな不安な予感の中僕はチームメイトの顔を見た。
『いきましょう』
そう力強い返事が返ってきた。
そして僕が投げた一球はわずか直径３CM のビットにヒットした。
思わずガッツポーズをする自分。
それに祝福するようにチームメイトとがっちり自然と握手した。

１－１３
それが最終的なスコアだった。
その後の試合展開は完全に向こうのペースで勝つどころかその後僕らは１点もとれなかったのだ。試合に勝つためには奇跡を常識にしないといけない。そう認識した試合だった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
結局日本代表初めての海外遠征はシングルス２敗、ダブルス２敗、トリプルス１敗、プログレッシブ１敗、プレシジョン１勝の計１勝６敗で幕を閉じた。
ありがたい事に宿泊費、食費、移動費等は全てオーストラリアが負担してくれた。
オープニングセレモニーの時に会場に流れた君が代（何故か２番まで流れ、少し長い気も

したが・・・）を聞いていると自分が日本代表としてここにいる事を再認識した。
世界トップクラスのオーストラリアの環境はすばらしいものであった。
日本の GW を利用して行ったので
『いつ来た？』　と聞かれ『昨日の朝』『いつか帰る？』と聞かれ『明後日の朝』
と滞在時間は３日間の強行スケジュール。
たった４日の休みが何で黄金の週なんだと本気で驚かれたのには国民性の違いを感じた。
生きるために働くのと、働くために生きる違いを学んだ瞬間だった。
＊＊＊

＜世界選手権ボスニア＞　２００７年９月

世界選手権前に思う事があった。
世界選手権が人生の一つの区切りだと感じている。
世界選手権後の事は全く考えていない。
世界選手権で最高の結果が残せればそこで人生が終わってもいい。
それぐらいの気持ちで挑んでいる。
それ程２年に一度の世界選手権は僕の人生にとってかけがいのないもとなっていった。
そして僕の３度目の世界選手権が始まった。
思いを形に変えるために。
そして今大会には前大会では参加していない国も訪れていた。

■プログレッシブ
前回と同様メイン種目のプログレッシブに出場した。
目標はトリノでだした１９点を越えること。
OVER　THE　TORINO　を合言葉に僕のプログレッシブ世界選手権３度目の挑戦が始まった。しかし思った以上にボールが的を捕らえない。
完全に外れているわけではなく、僅かに左にずれているだけだった。
しかし結局最後まで調整ができず１８点という平凡なスコアーで終わってしまった。
２年前のトリノでは１９点で大満足だったが、今の僕の実力では１８点は残念な結果だった。しかし吉報があった。
予選通過者１６名中、なんと１６位で突破していたのだ。
もう一度勝負できる。
そんな嬉しさとリベンジする気持ちで一杯だった。
翌日行われたプログレッシブ本選、残り１秒で得点するという維持を見せたが結局予選と同じ１８点に終わった。２回やって２回とも１８点。
これが今の実力と納得するしかない状況だった。
これがたった５分間の勝負プログレッシブの恐ろしさである。

■　プレシジョン

●　予選突破の意味とは？

プレシジョンの予選突破点数は１２点、これをたった２回のうちにクリアーしないといけない。これまでの世界選手権での日本代表成績最高点数は３点だった。
それ程この舞台で限られた時間の中で成果を出すことは難しい事だった。
プレシジョンは集中の競技、ボールを投げる前は会場がシーンと静まる。
そして投げるプレイヤー視線が集中する。
その独特な雰囲気の中、普段のリズム、実力をいかにだせるかが今回のキーポイントだった。予選１試合目、１球目から６球目までボールがかすりもしない。
嫌な空気が会場を包んだ。そして７球目、僕が投げたボールが見事ボールにヒットした。
思わず飛び出してガッツポーズをする。
そして会場から温かい拍手。しかしそれでもまだ３点だ。
悪い空気が取り払らえたのか次の８球目も見事ヒット。
４点プラスして７点となった。次のボールは惜しくも外れたが、
その次のボールはヒットして１０点。
最後のビットが５点なので、これを当てれば当種目日本人初の予選突破という所までやってきた。予選突破はこのスポーツを真剣にやっている証明でもあった。
出場する事はできても予選突破する事は並大抵の努力ではできない。
そんな事を証明する大切な一球だった。
しかし無常にもボールは僅かのところで外れてしまう。
投げたボールが身近すぎたのだ。
最後のチャンスにかけるしかない。僕は後一回残っている最後のチャンスに全てをかけた。

●　ボスニアの奇跡

スポーツをやっている人間だったら一度は耳にした事がある心技体！
体はひたすらトレーニング。
技はひたすら考える。そしてトレーニング。
心は…
心は…
心は何だろう？

人はある一定の集中力を超えると時が止まって見えるという。
知り合いの元卓球アジアチャンピオンと格闘技世界チャンピオンから同じような話を聞いた事がある。
科学的にも脳が集中し圧縮され時が止まるような感じなる事は証明されているらしい。

よくプロ野球選手で球が止まって見えると聞くけれどそこまで行けば本物だ。

僕にもその瞬間が過去に一度だけあった。
スポールブールでの世界選手権での事。
後一球当てれば勝利という所で僕は６球連続外した。
二年間努力した結果が次のラスト一球で試される。

この時自然体になった。
心が落ちつき音が消えた。何にも考えず素直にボ～ルを投げた。
ボ～ルが手から離れる間約３秒弱。
すごく時がゆっくりに感じた。
ボールがヒットした瞬間僕は何が起きたか分からなかった。
そして全身から喜ぶが溢れてきた。

体でも脳でもなく心から感情が溢れてきた。

●５CM の差
奇跡の予選突破から一夜、完全に会場は僕の味方となっていた。
試合前のウォーミングアップ中、僕が投げると手拍子が起きる。
そして当たると拍手、外れると大きなため息が起きる。
それは昨日感動を与えてもらったことに関する感謝の表れだったのかもしれない。
本選が始まったが４球投げた時点でまだ０点、しかし予選１試合目の後半の追い上げがあったからまだ気持ちに余裕があった。
しかし何故かボールがヒットしない。
『１球当てたらヒーローですよ』　サポートでいた選手が僕につぶやいた。
もう会場はそんな雰囲気だった。
会場が早く僕の初ヒットを待っていたのだ。
まずは１球当てよう。知らず知らずのうちに硬くなっていた僕の体がほぐれた瞬間だった。
次の投球で見事ボールはヒットした。
昨日と同じような割れんばかりの拍手。
もう勢いはとまらない。
次のボールも連続ヒット。会場はお祭り騒ぎだった。
その次こそは外れたが、次にボールがヒットすると昨日の再現を予感させた。
最後のビットを残して１１点。
ベスト８まで残るにはどうにか当てたい。

僕は想いを込めてボールを投げた。
ボールの起動は悪くない。ターゲットに向かって真っ直ぐ飛んでいる。
しかし無常にもボールは５CM 短く地に着いた。
たった５CM の違い。しかしそれがプレシジョン。
結局次のステージに駒を進めたのは１５点を獲得した中国だった。
後５CM ボールが伸びていれば、１６点で僕が通過できた。
あまりにも遠い５CM の壁だった。

しかし、僕の顔は満足だった。
やり遂げた。これが今の実力だ。
自然と笑みさえ浮かんできた。

前回悔しい想いをしたダブルス。
今回の予選は地元ボスニアと、最近力をつけてきているアメリカ、ドイツとの同ブロックとなった。最初の強豪ボスニア戦は０－１３と完敗。
なにもできなかったというのが印象だ。
そして次はアメリカとの対戦。勝てば、ドイツと予選をかけて闘うことになる。
恐らく実力は互角だろう。
■ダブルス　（VS アメリカ）

０－１３。
僕のダブルスの世界選手権は出場参加国中ビリの成績で幕を閉じた。
トラディショナル競技の世界との壁は大きな差がまだまだある。
闘っていてけして相手がそこまで強くないと感じたのが唯一の利点だった。

＊＊＊

＜プレシジョン自己最高得点＞　２００８年2月

プレシジョン２２
プレシジョン２２世界王者！
一度はその言葉に憧れた事が
誰もがあるだろう。
男なら。

マラソンだと２時間６分
１００メートルだと９秒８６
他スポーツでも死に物狂いで
練習したものが勝ちとれる。

そんな世界王者に今日一歩近
づいた。

去年のスポールブール世界選
手権の優勝スコアが２５点、
準優勝が２３点、三位が１７点。

なんと今日の練習で２２点の記
録がでました。
もちろん日本新記録。
極寒の強風の中ででた高記録。

２年後世界王者として新宿の
水タバコ屋でシーシャを吸って
いる姿が目に浮かぶ今日このご
ろです。

なんでもいいから世界王者にな
りましょう。
男なら。

＜全日本選手権＞　２００８年６月

東京で行われた全日本選手権、日本一の座をかけて争う日本ではもっとも重要な大会だ。
過去に行われた大会で全種目優勝した人はいなかった。
僕は今大会全種目優勝を目標としていた。
その目標を達成した時に僕はどんな気分になるのか？
それが楽しみでしょうがなかった。

●全試合内容
１日目はトラディショナル種目のシングルとコンビネ。
シングルは予選を２位で通過して別ブロック予選１位者と対決。
準決勝、決勝と勝ち進み順調に一つ目のタイトルを獲得した。
２種目目のコンビネも日本記録こそはでなかったが安定したスコアで勝ち進み、
二つ目のタイトルを獲得した。
２日目はプレシジョン、プログレッシブ
プレシジョンは一発勝負。
何球目を当てて何点ゲット。
そして最後の５点のビットも見事ヒットした。
またしても日本記録１９点こそは超えなかったが、
１５点という高得点で見事３つ目のタイトルをゲットした。
最後の種目のプログレッシブ。
もう勢いは止まらない。
３９球投げて２３点は日本新記録。と同時に２年ぶりにトリノの記録を破る事のできた自分がいた事を嬉しく思った。
僕はまだまだ成長できると確信した瞬間だった。
＊＊＊
４種目全て優勝の実現は僕にとっては次のステップを表していた。
日本に敵はいないのか？
この日僕はオーストラリアへのスポールブール留学行きを決意したのだった。
もっと強く、もっと大きな男になるために。
太平洋に勝つために、僕は太平洋を渡る決心をしたのである。
＊＊＊

＜ペタンク全日本選手権出場＞　　２００８年7月

生きるか死ぬかの闘いが始まった。

なぜか太陽が希望の光に見える。

なぜか心が踊る。

期待と不安が僕を支配する。

どんな出会い、ドラマが待っているのだろうか。

これが生きてる実感。

そして、
絶対に負けられない闘いに負けた。

一言で言えばしょうがない（賞がない）
次に行こう（勝者にお酒をツギに行こう）

負けた時も勝った時も大事な事は試合後に何故こうなったかを分析する事にある。

分析なくして次はない。

技術、戦略、精神力、試合前の環境、チ～ムワ～ク等を批判ではなくて分析して
次に繋げる必要がある。

負ける時は負ける。

問題はそれを受け入れて糧にする事だ。

生きるか死ぬかの勝負がしたい。

＜台湾遠征＞　２００８年１１月

台湾で行われるペタンクアジア選手権の舞台で、スポールブールのデモストレーションと指導をして欲しいという依頼が入った。来年のワールドゲームス台湾開催を睨んでの事だった。いや正確には２年前に台湾が U18 世界選手権で日本に訪れた時に作った人脈を頼って、自ら志願した事だった。依頼が入ると依頼を作る。きっかけは違うがやる事は同じ。
依頼が入らないうちは依頼を自ら作るしかないのだ。
こうして僕は２年前の人脈を頼って日本から台湾第二の都市高雄へ飛んだ。

ペタンクアジア選手権は何年に一度アジアで開催される。

● 王監督との出会い

ペタンク大会会場につくとペタンクのチャイニーズタイペイの選手が練習をしている。
やはりアジア大会だけあって立派なコートができあがっている。
照明や音楽設備も整っているようだ。
そして、どこかにスポールブールの選手もいるはずだ。
僕は耳を澄ませた。しかしティールが当たる音が一向にしてこない。
スポールブールのティールが当たるとカーンと大きな音が響くからどこでやっているかはすぐ分かる。
しかしここまで音が鳴らないと、場所を間違えたか、休憩中か、はたまたやってないのではないかとすら疑問が沸いて来る。
まさか室内にコートを作ったのか？という期待の声も裏腹にやっとボールが当たった音と歓声が聞こえた。歓声が聞こえたほうにいってみると、確かにボールを投げている選手が数人いる。
音が鳴らなかったのはボールがなかなか当たらなかったからだった。
海外でスポールブールの選手を見つける瞬間は感慨深いものがある。
アフリカのコンゴで日本人バックパッカーにあうイメージだろうか？
スポーツを通すと世界中に人脈がすぐできる。同じスポーツを愛している家族だからすぐに心が通じ合うのだ。
『DO　YOU　SPEAK　ENGLISH』と中国語が話せない僕は英語で指導していた監督らしき人に話しかけた。
『日本語話せます』と日本語で返答がきた。
返答した王監督はペタンクのチャイニーズタイペイ代表選手。
前回パタヤで行われた世界選手権にも出場した。
日本にも何度か来た事がありかなりの親日家だ。
ワールドゲームに備えてチャイニーズタイペイのスポールブール代表監督に任命されたようだ。日が経つうちにみるみる成長しているのが分かる。

しかし全く英語が話せない台湾学生と、全く中国語が話せない僕がどう指導をしていくのか？王監督に通訳をしてもらいながら、些細な事も注意していく。
しかしスポーツとは不思議だ。
言葉は通じなくても、ジェッシャーで相手が言いたい事は大体分かる。
多分自分も悩んだ事がある点を彼らも悩んでいるからであろう。
日が経つにつれて、彼らから質問してくる事も多くなった。
そして、王監督が大学の体育教師をしている事もあって集まっていた選手も才能が溢れる体育大学学生。

しかしある日事件が起きた。朝起きて練習会場にいつものように行くと、練習にきているのは女子だけだった。『ニクイナーリ』（男子はどこだ？）と女子に尋ねると、
『老師、アングリー、ゴーバック台北』という答えが返ってきた。
恐らく深夜酒でも飲んで羽目を外してしまったのだろう。

数少ない合同練習の数少ない選手をたった一度の不祥事で帰らせてしまう王監督に今回のワールドゲームスにかける強い意気込みを感じた瞬間でもあった。

そして男性がいない事が何事もなかったように練習を開始する王監督。
少しでも気を抜けば大変な事になると現場が引き締まった瞬間でもあった。
今回の滞在費は全て台湾の協会が負担しているようだ。
お金を費やして指導しているのに何事だ。
一番悔しい想いをしたのは王監督だったのかもしれない。

ともあれたった１週間程の練習だったが、急速に力をつけていった。台湾代表チーム。
初心者から経験者になった彼らの今後の成長が楽しみである。

●中国とスポールブール
今回中国チームもデモストレーションのために台湾を訪れていた。

●　デモストレーション内容
今回僕が行ったデモストレーションはプログレッシブの３分間
女子世界チャンピョンの中国選手と共に行った。
ウォーミングアップの時間、中国選手が場所を独占してなかなか使わせてくれない。
試合前に彼らに遠慮という言葉はないみたいだ。
逆に凄まじい殺気すら感じた。
その場が中国一色の雰囲気になっている。
『豊田さんも練習！練習』
そう大きな声で王監督が僕に問いかけて我に返った。
僕はここに何をしにきているのだ。
わざわざ台湾まで遊びにきたわけではない。
僕を表現しにきたのだ。
王監督からしてみれば『何をしているのだ、相手の雰囲気くらい自分で変えるくらいしなきゃだめだ。』そう僕に問いかけている気がした。
次の瞬間、僕は強引に、次は僕の番だとばかりにボールを投げた。
僕のボールをサポートしてくれる中国選手達。
あなたもやるのね？とばかりに順番に入れてくれた。
ちょっと前までの殺気は僕に向けられていたものではなく。
これから始まる自分との戦いの高ぶれなんだと認識した瞬間だった。
人生は待っていては駄目だ。表現していかなければ。
そして、デモーストレーションが始まった。

日本選手の TOYODA 選手です。数百人はいるペタンク選手、監督、関係者、観客、今大会のスタッフ、ボランティアに英語と中国語と日本語で紹介される。

恐らく初めてスポールブールをみる人も多いだろう。
大音量の音楽が流れる中、デモストレーションが始まった。
一球ボールを投げるたびに MC が GO、GO、GO と騒ぎ出す。
そしてボールが当たるたびに数百人から拍手と歓声があがる。
そこにいる誰もが僕が何者で何のためにスポールブールをやっているのかを知らない。
でもそんなの関係なかった。
始めてみるペタンクの原型のスポーツに興奮しているのを感じた。
そしてまた違った想いでみていた人もいた。
ペタンク日本代表の方々だ。
Ｕ１８世界選手権、ペタンク全日本選手権での顔見知りもいたことと、今回ホテルが同じだということで親近感がずっと沸いていたに違いない。
そして数百人の前で行われる異国でのデモストレーションに同じ日本人がでている異空間。
デモストレーション前から頑張って下さいと励ましを頂いていた。

結果は３分間で１０球のヒット、結果としては少し悪いという内容だった。
でもそんなの関係なかった。

台湾という異国で自分自身を発信できている。

そして終わった瞬間に感動しました、と言葉を頂いた。

来てよかった。ここにいてよかった。

台湾にきてたった３分の僕の表現時間だったが、
それは僕の人生にとって大きな３分間だった。

＊＊＊

＜タイ遠征＞　２００９年１月

Ｕ１８世界ペタンク選手権、台湾でのアジア選手権で世界中のペタンク選手、関係者と知り合えた事から、日本でもペタンクとスポールブールは今後協力しなければならないという事を強く感じた。
そしてペタンクでの国際関係も構築する必要があると認識したのだ。
認識したのであれば行動に移すまでだ。
僕はタイで行われるペタンクアジア大陸審判試験に向かった。
日本ブール業界発展のために。

＊＊
この遠征で一番の収穫は各国のペタンク関係者と知り合えた事だ。
フランスを始め、タイ、台湾、ラオス、ベトナム、シンガポールとアジア各国参加していた。また、台湾からは王監督も参加しており、再会を楽しんだ。
アジア選手権であったタイの選手とも再会を果たしジャグリングを教えた。
また前回の女子世界選手権世界２位となったタイの選手とも知り合う事ができた。
彼女はタイの軍関係に勤めており、勤務のほとんどはペタンクの練習をしているという。
ラオス監督とはペタンク試合を楽しんだ。
ベトナムコーチからはベトナム訪問を打診された。
シンガポールも訪れてみたい。
人脈が広がれば視野が広がる。欲求が増える。
そんな事を学んだ遠征でもあった。
＊＊

＜全日本選手権＞　２００８年４月

オーストラリア留学、遠征が控えた２週間前に開かれた日本選手権。
前年に全種目制覇してオーストラリア留学を決定づけた大会だ。
もし、一種目でも負けてしまったら、オーストラリアに行く意味が半減してしまうだろう。
日本チャンピョンとしてオーストラリア入りするかしないかは、大きな違い表していた。
絶対に負けられない戦い。そんな環境の中で、日本選手権が始まった。

●試合内容
負けられない闘いだ
負けられない闘いを経験した人はどれくらいいるんだろう
なんとも言えない感情だ
一昨年の日本選手権は全種目（四種）完全制覇。
うち一種目は日本新記録
僕の自信が確信、そして挑戦へ繋がったあの日から一年
負ければ全てが無になる怖さを感じていた
第一種目はプレシジョン
日本記録を持ち次回の世界選手権でメダルを目標にしている種目だ
苦しい闘いだった
予選は二位で通過
予選一位者は僕の持つ日本記録に迫る記録を予選で叩き出していた
しかし、ここで躓いていては世界は遠のくばかりだ
予選通過者三人で行われた決勝
なかなか均衡が破れない
最初に点を入れたのがなんと予選通過三位者
しかし直ぐに二人が追い付く
そしてそのままゲームセット
三人同点のまま再試合となった
（ここで決めたかった…）と呟いた予選三位通過者
そして再試合が始まった
最初に点を入れたのが予選通過者一位
１点．２点と連続して点を入れた
僕も負けじと四点を獲得
四対三で一点リードの状況
（絶対もう一山ある）
そう心をコントロールしていた瞬間に相手が四点をゲット

７対４と逆転される
敵ながらあっぱれであり、同じ日本チ～ムとして頼もしい限りである
しかし残りあと二球正に万事休すである
負けるのはまだ早い
今までの経験と維持、そして未来への希望をのせたボールは見事ヒットし三点をゲットし同点に追いついた。
そしてそのままゲームセット
予選通過者一位と再度再試合となった
再試合の結果は一対０
しかしあまりにも重い一点だ
勝つと負けるとでは天と地の程違う
あまりにも大きな一点だった
その一点の差はなんだったんだろうか
たった一点だがとてつもなく大きな一点を感じたのは初めてかもしれない
もしかしたらこの半年間ほぼ毎日練習してきた神様からのプレゼントだったのかもしれない
一種目を皮一枚で優勝した僕は続く二重目、三種目を制覇した。
二年連続日本選手権出場全種目優勝
７年連続日本選手権優勝
負けられないプレッシャ～を楽しみたい
そして世界へのチャレンジに全力を尽くしたい
負けられない闘いから勝つしかない闘いへ

＜オーストラリアスポーツ留学＞　２００９年４月

オーストラリア留学を心に決めてから１年が経とうとしていた。
言葉とは不思議なものだ。
言葉にだすと何故か物事がその方向に進みだす。
資金、仕事の調整、今後の不安、周りへの配慮等、全てが未知の世界、
留学したからって成果が確約されている分けでもない。
しかし未来への欲求には勝てなかった。
この人生の中に確保した３ヶ月間はここに至るまでさえ困難を極めた。
数々の決断を強いられた。
しかし確約されている現実と未知の世界の未来を対比する事は難しい。
常に心に置いている言葉。俺はここで終わるのか？
僕は新たな人生を自ら切り出していった。
成田からの飛行機がオーストラリアに着いた時、
不安な気持ちで一杯だった。

● サント

サントのプレイを見たのは世界選手権トリノ大会が始めてだった。
この大会では彼は調子が悪く１６点という記録で予選落ちしていた。
明らかに体力不足が露呈していた試合内容だった。
試合が終わると悔しそうにボールに八つ当たりをしている。
心理的にもまだまだ成長が必要な選手だった。
この時の僕の点数が１９点なので記録上では彼を上回った事になる。
それから２年後、彼はトリノ大会では３１点という好成績で世界９位にまで食い込む
心と身体ともに成長を成し遂げていたのだ。
彼にトレーニング内容を聞くと、一日１０キロは走り込んでいる。

という答えが出てきた。やはりトリノ大会の反省を最大限に生かしている様子だった。
思えばメルボルンに来た初日に途方にくれて CITY を歩いている時、いきなり誰かが後ろから飛びついてきた。
『JAPAN』と言いながら嬉しそうに握手を求めてきたサントだった。
奇跡の偶然の再会から僕のメルボルン生活は一変した。
サントが練習クラブを紹介してくれて、一緒にクラブまで送り迎えをしてくれていた。
マックに入ろうとする僕をとめてプログレッシブによくないと、ケンタッキーに入るサント。このサントとオーストラリア滞在中に３度のプログレッシブ日豪対決をするとは思いもよらなかった。

■日本代表オーストラリア遠征

●試合内容
■プログレッシブ
日本代表の今回遠征成績は、シングルス　１敗、ダブルス　３敗、トリプルス　２敗、プログレッシブ１敗の通算０勝７敗だった。
世界トップクラスであるオーストラリアと日本の実力はこれほどまでの差があるのだ。
そして最後の種目であるプログレッシブが始まった。
相手はオーストラリアチャンピョンのサント。
２年前の対戦でも完敗をしている。
今までの練習では勝つどころか大きな大差をつけて負けていた。

そんな状況の中ジャパン対オーストラリアの最終決戦が始まった。
『最後くらいは勝とう』と試合前に、監督がふいにいった言葉
これまでの成績の状況からその言葉がでてきた時。僕はふっと我に帰った。
そうだ。僕はここに勝ちにきたのだ。
僕は周りの雰囲気に飲み込まれ負のオーラの中にいたのだ。
勝とう。心の中で気持ちが固まった瞬間、試合が始まった。
この日は何故か調子がよかった。
４球連続ヒットした後、１球外したが再び５球連続ヒット。なんと１０球投げて９球がヒットした事になる。最高のスタートだ。
会場中が驚きと歓喜で沸いているのが分かった。
この時僕は自分でも少し興奮状態にいるのが分かった。
これは特別な事ではない。平常心を保って集中しよう。
そう心を入れ替えられたのがよかった。

５分間という時間の中で今までの試合では必ず当たらなくなる時間帯があった。
疲れと集中力がきれてしまうからだ。
しかしこの３ヶ月間僕は１日５キロ以上走りこんでいた。
オーストラリアチームとの合同練習で自己記録も更新していた。
技術的にも精神的にも学ぶ事が多い練習期間だった。
そして何よりも仕事を辞めてからほぼ半年間毎日投げ込みをしていた。

一流選手の証であるプログレッシブ３０という壁。
僕はスポールブールを始めた時に密かにこの数字を目標としていた。
苦しい練習中もこの数字が僕を支え続けていた。
日本ではマイナースポーツである以上、このスポーツをやっている意味を問われる事が多い。そして競技人口も少ないため日本代表の価値を問う人も多い。
どうせ誰でも簡単に代表になれるんじゃないかと・・・
それだったら最強の日本代表を目指そう、世界に通じる日本代表になろう。
僕の相手は日本じゃない、世界だ。
そういった強い気持ちからプログレッシブ３０達成という強い気持ちが現れてきた。
あれからもう７年近い年月が経とうとしている。

僕は人生で一番プログレッシブ３０達成という近い位置にいたのだ。
５分間の内３分間たった。いつもならここでガクンと点数が落ちる。
しかし、走りこんだ分体力がついていた。
少し当たらなくなる事もあったがボールはほぼ直線を保っていた。
オーストラリアでの練習で力ではなく指でボールを遠くに投げることも学んでいた。
最後まで３０点を意識した。後何球あてれば３０球なのか分からなかったが、１球、１級当たるたびにその点数に近づいているのが分かった。
最後まで点数が落ちる事がなかった。そして試合終了のホイッスル。

自分の想像を超える記録がでた時の感情は感慨深いものがある。
人生でも中々感じる事ができない感情だろう。この瞬間が好きだ。
だから可能性がある限りこのスポーツを続けている。
自分がどこまで成長できるのか？それが記録となって現われるからだ。

結果は２９点。後１点という所で３０点には届かなかった。
やはり３０点という壁はそんなに甘くはない。

しかし、１点という壁はもう一つあった。

オーストラリア代表サントの点数は２８点だった。
目標の３０点には届かなかったが、オーストラリア代表から奇跡の勝利をもぎとったのだった。
試合終了後サントとがっちり握手をする。
会場中が驚きと最高のパフォーマンスをした僕とサントへの拍手で溢れていた。
その場にいた多くの人から握手を求められた。
WELL　DONE！！！

この会場にいた人で僕の勝利を確信していた人は一人もいなかっただろう。
僕の勝利を予感していた人もいなかっただろう。

『最後くらいは勝とう。』

その言葉は現実となったのだった。

不可能を可能にする。その瞬間をつくることに感動が生まれる。
２年に一度行われる日本対オーストラリアの国際交流試合は１勝７敗で幕を閉じた。
この奇跡の１勝は自らの人生を変えてオーストラリア留学を実行した勇気を称えて、神様が僕にくれたプレゼントかもしれない。

Cronache di Melbourne

Bocce: torneo d'amicizia con il Giappone

■全オーストラリア選手権

●たった一人の日本代表

メルボルンの奇跡から早１ヶ月、僕はアデレードという街で行われるオーストラリア全州選手権に訪れていた。１年に１度、オーストラリア全州から選手が集まり各種目のオーストラリア NO１を決めるこの大会はオーストラリアで一番メジャーな大会だ。

この大会の開会式後、僕はオーストラリアチャンピョンのサントと再三プログレッシブの試合をすることになっていた。

日本から約１２時間、オーストラリアで行われた日本対豪州の試合は日本人一人という完全アウェーの中で行われた。

オーストラリア国家が流れると会場中が大喝采！！！

愛国心を強く感じた。

そして会場に君が代が流れた。

遠い異国で聞く君が代。

小学校、中学校、高校と行事のたびに流れていたこの歌をまさか日本代表としてオーストラリアで歌う事になるとは当時の自分からは全く想像もできなかった。

たった一人の日本代表。

そんな状況の中で試合が始まった。

開会式の後という事もあって全くウォーミングアップができない状況で突如行われた試合。

サントのボールが当たるたびに会場から拍手が溢れる。

アウェーでの試合では皆が敵に感じる。

この空気は凄い。

よく、サッカーの国際試合でアウェーは不利というが、それは本当だ。

場所、言葉、食べ物、湿度、温度等様々な要因はあるが、

一番の要因は自分が勝ってはいけないじゃないかという雰囲気があることだ。

このすさまじい空気の中の試合は今まで経験がなかった。

十分な準備ができなかった状況でオーストラリアチャンピョンに勝てる訳はなく

１７対２４というスコアーで敗戦した。

試合が終わるといろいろな人から WELL DONE　と握手を求めれた。

その人たちの顔を見ていると非常に興奮して嬉しそうな顔をしていた。

その嬉しさはオーストラリアが勝ったうれしさよりも、日本対オーストラリアの試合が見られた嬉しさ、そして何よりもスポーツを通して今同じ場所、時間を共に共有できている嬉しさを感じているようだった。

サッカー日本代表がワールドカップ予選のためにオーストラリアを訪れるたった１２日前にもう一つの日本代表がオーストラリアで試合をしていたという事を知っている人は今この文章を読んでいるあなただけかもしれない。

6
10 11 12 13
12 13

■ ブロンズウィーク

オーストラリアで行われる各大会は基本的に各クラブチームの戦いとなる。
すなわち３ヶ月滞在の僕でもどこかのクラブに属さないといけないことになる。
僕が選んだクラブはブロンズウィーククラブ。
始めの日にサントに紹介されたクラブだ。
いつも青いアディダスのニット帽を被っているジョンが僕にこのクラブの歴史を教えてくれた。１９８０年にクラブを設立した時は原っぱでスポールブールを楽しんでいた。
そのうち会員が３００人を超すようになり、お金を集めて建物を建てた。
国にお金の援助を申請し、コートも作った。ここは俺達のオアシスだ。
そう話ながら毎日ワインを飲んでいる。毎日練習に通っていると毎日同じ人に出会う。
クラブには常時１００人程はいるだろうか？しかし実際にスポールブールをしている人は１０人くらいだ。そのクラブのほとんどの人が仕事をリタイアした年金暮らしだ。
平均年齢は７０歳を超えているクラブ。僕が一人で練習していると、試合を挑んでくる人、ワインを奢ってくれる人、ジュースを奢ってくれる人、イタリア語で話かけてくる人、英語で話しかけてくる人、俺の息子はチャンピョンだった自慢する人、ただひたすらプレイを見ている人。色々な人がいた。その中でハット帽を被り、杖をつきながら僕に近づいてきた老人が言った言葉が忘れられない。
YOU CAN PLAY ALL OVER WORLD IF YOU WANT.
そうそれがスポーツの魅力でもあるのだ。

＜台湾ワールドゲームス視察＞　２００９年７月

２００９年７月１６日から始まるワールドゲームス視察のため僕はオーストラリアを離れ台湾にきていた。
９月に行われる世界選手権前にどうしても４年に一度のワールドゲームスを見ておきたかった。ライバル達がどんなパフォーマンスを見せてくれるのか？
前年の１１月に来た時にデモストレーションと台湾学生にスポールブールを教えてきたが、世界のトップチームが集まる WG に台湾代表はどこまで力を上げているのだろう。
そして今回どんなドラマが繰り広げられるのだろう。
台湾行きの飛行機の中から僕の気持ちは高まるばかりだった。

■女子プログレッシブ
台湾代表は９ヶ月前に僕らがスポールブールを教えたのが始めての経験だった。
そして今年４月に１週間、イタリアからコーチが来て２度目の合宿、
三度目は本番１ヶ月前から今まで最終合宿を開催しただけだった。
本番１週間前にはイタリアのコーチ、選手が再度熱心に指導。
これだけの練習でどこまで力が伸ばせるのか？
僕の心配は最初に行われた女子プログレッシブですぐに吹き飛んだ。
９ヶ月前にボールを始めて握った選手が始めての世界の舞台で見せた快挙だった。
たしかに女子と男子ではルールが違い、ボールが３つで折り返しになる。
しかし彼女のフォームはあきらかに９ヶ月前とは別人だった。
ボールを投げてはリズムカルにヒットしていく、
それ以上に驚いたのは脅威的なスタミナだ。
全く疲れる事を知らないのかペースが落ちることなく走り続けている。
４６球なげて３２球ヒットは本場イタリアと並んで第３位の成績で予選を突破したのだ。
彼女の才能が開花したのか？
その才能を見出した王監督の力か？
それとも彼女の努力の賜物か？
恐らくその全てがマッチしてこの結果がでたのだろう。

『次は中国を倒す』と笑いながら言った彼女のその目は本気だった。
しかし次の日に行われた準決勝では、前日の奇跡は起こらず１７点という平凡なスコアで幕を閉じた。これがプログレッシブ５分間の怖いところだ。
全く当たらなくなってリズムが崩れると、悪い方に転がってしまう。
どういいリズムをつくり保っていけるかが経験値として問われる。
準決勝には敗れた彼女だがまだ３位決定戦が待っていた。
本場イタリアとの直接対決だ。
翌日早朝に行われた運命の三位決定戦。
イタリアの意地か台湾の勢いか？
どっちが勝ってもおかしくないまでに成長した台湾代表。
しかし結果は２８対３３で敗れてしまった。

■プレシジョン女子
とうとうメダルが期待できる台湾代表はプレシジョン女子だけになってしまった。
世界トップクラスが集まる中、台湾代表は予選で１２点という高得点を叩き出す。
フランス２２点、イタリア１８点、中国１６点に続いて４位で予選ぎりぎりのラインだ。
そして残るはベネズエラとペルーとなった。
さすがのベネズエラは１２点でかろうじて４位ぎりぎりにつける。
ペルーも最後一球当てれば逆転予選通過という所までスコアを伸ばしてきた。
僕の隣で一緒に観戦していた台湾代表はもう見てられないという仕草。
そんな状況の中、ペルーが放った１球はほんの僅かな差でビットから外れていった。
同率４位、しかし予選突破は４名だけだ。
台湾代表とベネズエラ代表の予選突破をかけた延長戦が始まった。
終始台湾代表リードのまま試合は進んでいく。
しかしアウェーベネズエラも奇跡のティールを連発して最終ターゲットを残して同点にまで追いついた。
そしてベネズエラが放った最後の一球。
ボールは綺麗にビットにヒットした。
しかしまだ喜ぶ顔は見せない。
まだ台湾代表も最後の一球が残っているからだ。
この最後の一球は本当に難しい。５球投げて１当たればいいほうだろう。
会場の誰もが祈る気持ちだった。
そして台湾代表が放った一球は今まで投げた球で一番綺麗な球筋だった。
どんな世界にも生まれ持ってドラマをつくれる人間がいる。
同じにおいを感じた瞬間だった。
大きくガッツポーズする台湾代表、会場はもうお祭り騒ぎだった。

そしてどちらかが１球外したらそこで終了するサドンネスに突入。
しかしもう台湾代表の勢いはとめられない。
明らかに集中力のきれたベネズエラ代表が一球目を外すと、当てたら勝利という状況台湾代表は投げて瞬間おたけびをあげていた。
そして王監督に歓喜のダイブ。
地元応援団からは歓喜の拍手、チームメイトは感激のあまり涙を流していた。
大会役員も地元台湾代表の奇跡の予選突破には賛美の声をあげていた。

しかし台湾代表の勢いもここまでだった。
次の日行われた決勝戦では中国２０、フランス１９、イタリア５、台湾３で無残にも４位と破れさったのである。

今回台湾代表悲願のメダルは奇しくも指導をしたイタリア代表に食い止められる結果となった。まだ早い、そうスポーツの神様が言っている気がした。
試合が終わった後悔しくて号泣している台湾代表選手を見て、今後台湾が飛躍的に延びる事を確信した。
それと同時に日本での新世代の育成、普及活動に力をいれないとあっと言う間に台湾に置いて行かれる危機感する感じた大会だった。

■男子プログレッシブ
今回男子のプログレッシブでチャンピョンとなったのはスロベニアの選手だった。
決勝でイタリアを破ると大きな声でガッツポーズをしながらコーチとがっちり抱きあっていた。彼は普段はクロアチアのクラブで練習をしているという。
ほぼ毎日練習し、１日１０キロは走りこむという。
そしてクラブチームから生活できるぐらいのお金をもらっている正真正銘のプロだ。
ARE YOU　PROFESSINAL　と聞くと　普通に YES と答えた。
彼にとっては始めての世界タイトルとなった。
しかしそれ以上に会場を感動させてのが、プログレッシブのサポート役（ボールの配置等）を務めたのは旧ユーゴスラビアの選手達だった。
クロアチア、ボスニア、モンテネグロの選手がスロベニアを支えていたのだ。
試合後がっちり握手をしている彼らをみて、
試合前スロベニア選手が言っていた言葉が頭に浮かんだ。
『俺達は昔、一つの国だった。』
やっぱりスポーツに国境は存在しない事を認識した瞬間だった。

＊＊＊
今大会は再会の機会でもあった。
ペルーのアルフレード・チェベスとなんと４年ぶりの再会。
彼はビザの関係で２年前のボスニア世界選手権に参加していなかったからだ。
４年経っても全く変わっていないノリに嬉しさを感じた。
審判のトーマスともボスニア世界選手権以来の再会。彼は僕がチリ滞在時にスペイン語を英語に通訳してくれた恩人だ。オーストラリアにも僕が行く前に１ヶ月訪れており、お互いの思い出を語りあった。
タイの世界２位選手とも再会。
YOU　REMEMBER　ME？　と英語が話せない彼女から話かけられた。
そして今回見事彼女は決勝で王者フランスを破り世界チャンピョンの座を手にしていた。
これからは世界チャンピョンと呼ぶこととなるだろう。

その他にもチリでレストランに誘ってくれたアロード、
前回台湾であった中国世界チャンピョンと他選手、
ボスニア英雄、台湾の選手
そして去年１１月のペタンクアジア選手権でボランティアをしていた現地の台湾人がデモストレーションをした僕を覚えてくれていた事には少し驚いた。
今回あった全ての出来事を祝福するように、台湾では１００年に一度といわれる皆既日食が観ることができた。
こうして４年に一度のワールドゲームスは幕を閉じたのであった。
＊＊

＜本場イタリアへのスポーツ留学＞　２００９年９月

2009 年 9 月 15 日に僕は世界選手権に向けて出発するために成田に向かうはずだった。
ベトナム経由の格安航空券をゲットし大会に備え日々日本で練習に励む日々だった。
そんな時台湾であったイタリア代表チームのフーリオからメールが届いていた。
なんとイタリア代表チームとの合同練習の招待状だった。
そういえば台湾で世界選手権のマコンに向けてイタリアでトレーニングがしたいと話した記憶がある。そして台湾帰国後メールを一本イタリアに送っていた事をすっかり忘れていた。このタイミングでくるかぁ・・・
悩んだ末僕はベトナムでのバカンスをキャンセルし、本場イタリアのスポールブールを学びにイタリア、ローマに飛び立つ事に決めた。

Dear Toyoda,
Of course I remember you! I´m fine, and you? Is everything alright??
I heard about the earthquake occurred in Japan a few days ago!
With regard to trainings, we´d like to invite you to join our team club, or my group, especially from 7 September when my trainees are about to vacation.. Regarding accommodations, I have to search some information that fit your requirements; anyway I´ll inform you as soon as possible.

Yours truly,

■　イタリアとボッチャ
9 月１０日僕は成田を出発した。北京経由の羅馬（ローマ）着これから約一ヶ月、この一年の集大成にどんなドラマが待っているのだろう。
飛行機が日本を離れる瞬間はいつもワクワクする。そして飛行機が目的地に着く瞬間はもっとワクワクする。
イタリアのローマの空港に着いたのが夜２０時、宿代を浮かすために空港内で寝る場所を探す、空港内での睡眠環境は国によって全く違う。
僕が今まで泊まった事のある空港はインド、ウガンダ、ロシア、エジプト、オーストラリア２ヶ所、台湾４泊、イタリア、カナダである。
インドは寝る用のリクライニングシートが用意されていたため安眠。ウガンダは寝袋で空港内野宿で安眠、ロシアでは乗り継ぎが悪くみんな空港内で待機状態スペースもあり安眠。エジプトでは空港内掃除従業員が寝ている仮テントに招待してくれた安眠。イタリアでは椅子を横に使えば硬いなりにも安眠、台湾はなんと冷暖房完備のやわらかいソファー（ＴＶ付き）で安眠、オーストラリアは椅子に座りながらなんとか睡眠、違う空港では突然空

港が閉まり、空港の外で寒さに耐えながら睡眠。一番眠れなかったのがカナダ。外は氷点下２４度、空港のドアが開くたびに冷たい風が流れてくる。暖房なんてあったもんじゃない。高校の時日本の公園で初めて野宿をしたときに感じた寒さによる睡眠できないつらさをまたこの地で再び味会う事になるとは当時は予想もできなかった。

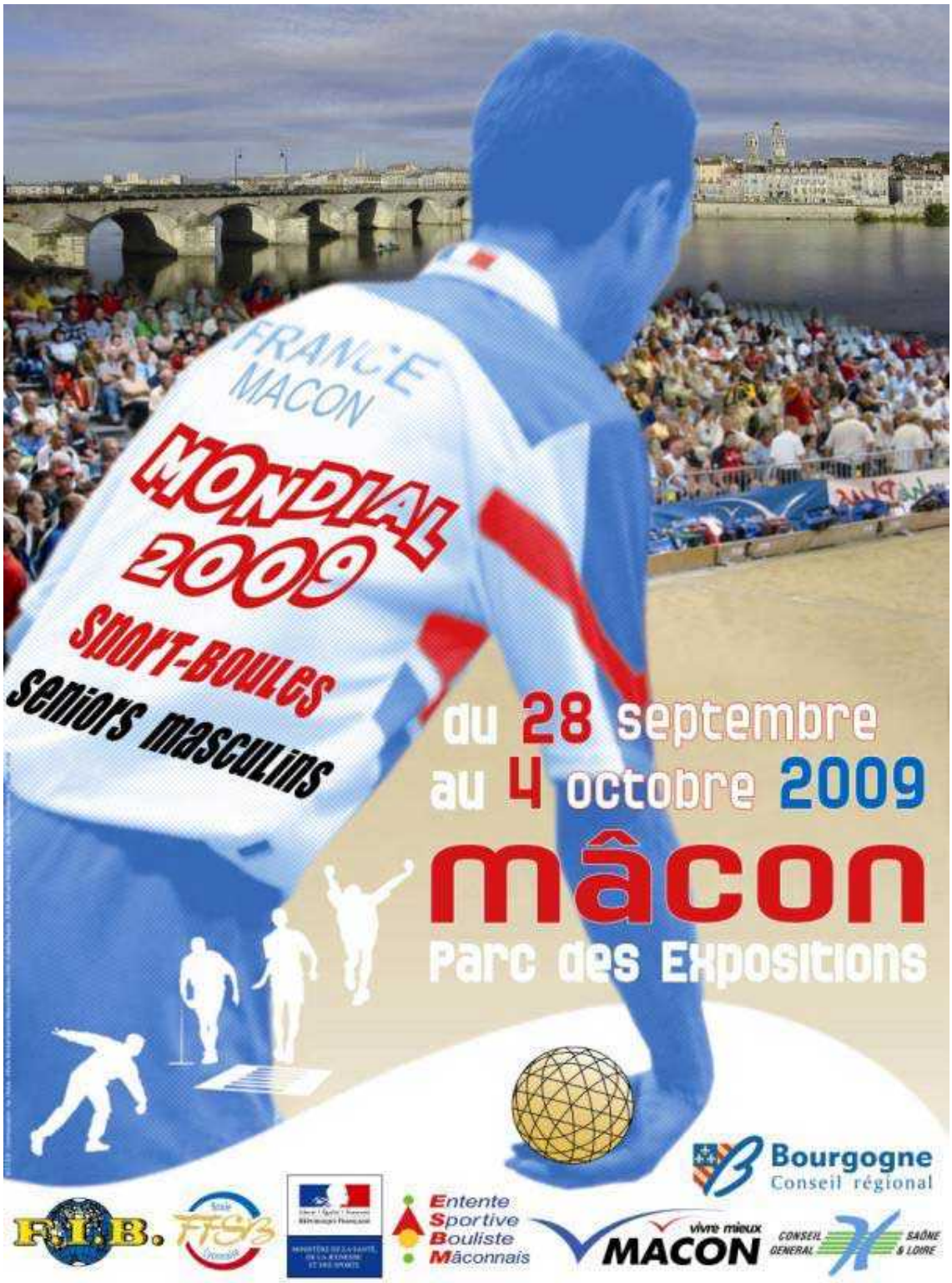
イタリアのローマに到着後、何故かスペイン語を話す人によく声をかけられた。
一人目は国際電話のかけ方が分からない人、二人目は国内の電話のかけ方が分からない人、三人目は電車の切符を何処でマークしたらいいか分からない人。
その三人に対処法を教えた（といっても一緒に考えて）
そんなこんなで僕はイタリアローマから４年前の世界選手権で訪れたトリノへ再び訪れるのであった。
イタリアのローマからトリノへ一番格安の夜行列車で向かう。
約１０時間。席を予約したはずが、その席に座ろうとすると黒人の方がそこは俺の席だと譲らない。よく確認すると僕の車両番号が違っていた。しかし車両を今から移動できない。
人が通路ですでに寝ているし、大きな荷物のせいで身動きがとれない。
しかたなく僕は通路にある半畳程のスペースに自分の荷物を置き、その上で座りながら仮眠した。
途中人が通るたびに起こされ、電車の騒音がうるさく、足が伸ばせない状況での睡眠はもはや、やすみませんと謝りたくなるくらいのすいみん環境だった。
旅と寝床は紙一重である。

■　イタリア代表との合同トレーニング
４年ぶりのトリノに着くと当時の重い思い出が溢れかえってきた。４年前にパリの夜行列車でトリノに向かい。トリノから宿泊ホテルまで行こうとしたが、携帯の電池が切れてしまって、唯一の宿泊情報が見られない状況・・・何とか日本に連絡し、住所を聞きだせたが、一時はトリノにまできて大会会場に到着できないという最悪の事態も想像できた事件だった。
トリノから今回練習するクラブチームがあるキエリまで電車で移動、キエリの駅に着くが、フーリオから送られた住所しか情報がない。
バスも、タクシーもない状況、田舎町で誰も英語が話せない状況で、思い切ってレストランで住所を見せる。何故か客の一人が食事を途中で辞めて僕をそこまで送っていってくれるという。さすが元同盟国である。すばらしい。
無事にクラブに着くと大勢の人が集まって食事をしていた。
大きな体をしたプレジデントが僕を出迎える。
恐らく本人は僕が何者かは知らない。
ただ異国から来た、プレイヤーであることは察したのだろう。

イタリア語でみんなと飯を食べろといきなりの高待遇。
このケースでお金を払った事はほとんどない。貧乏旅行者にとっては嬉しい限りである。
常に一食２ドルほどに抑えていた僕にとってレストランでの１５ドルはまるで夢のような食事だった。

＊　＊＊＊

そして決戦の地、マコンへと僕は向かったのだった。
マコンで結果を出せば太平洋に勝てると思っていた。
僕にとっては４度目の出場となる世界選手権。
この大会のために僕は仕事を辞めて一年間練習してきた。
その集大成の大会だ。


FRANCE
MACON
MONDIAL
2009
SPORT-BOULES
SENIORS MASCULINS
du 28 septembre
au 4 octobre 2009
mâcon
Parc des Expositions
Bourgogne
Conseil régional
F.I.B.
FFSB
Entente
Sportive
Bouliste
Mâconnais
vivre mieux
MACON
CONSEIL GENERAL
SAÔNE & LOIRE

＜最後に＞

スポールブールとの出会いは確実に私の人生を変えた。
ボール一つの力で世界中の選手が集まる、そしてその舞台で最高の結果を出すために自分自信を成長させていく。それは技術、体力もそうだが特に人間としての心を鍛える大きなきっかけになった。
2002年素人がオリンピック選手になれる競技がテレビ番組放映された。
それが私とスポーツブールとの始めての出会いだった。
2003年フランス（ニース）での世界選手権に参加をした時は、初めて体験する世界選手権、初めて見る世界プレイヤー、そしてその中にいる日本代表の私、私は参加する事で満足を得られていた。だが、この大会以降世界を意識するようになった。
2005年イタリア（トリノ）での世界選手権では、日本代表エースとして6種目中、4種目に出場した。日本選手初の予選突破、プログレッシブ、ラピットで世界9位という成績を残した。
2007年ボスニア（グルーデ）での世界選手権は、私にとって人生の大きな転機となる大会だった。プレシジョンでラスト1球当てれば日本代表として当種目初の予選突破がかかる瞬間、会場が期待と不安の雰囲気をかもしだす中、私のボールは見事ビットにヒットした。鳴り止まない大拍手の中で、今までの人生で感じたことのない体中からでてくる喜びの感動が忘れられない。私がスポールブールを本気で愛した事を確信した瞬間だった。
2009年フランス（マコン）での世界選手権は選手としてスポールブール人生第一の集大成となる大会だろう。プレシジョンンでメダル獲得、プログレッシブで30点以上を目指し、日々練習に励んでいる。
自分自身の成長、日本代表の成長を世界中に発信するために。
そして何よりもスポールブールを通して出会う事のできた世界中のスポールブールファミリーとの出会いを楽しみにしている。

Mondial Sport-Boules
4 10 2009

Mondial Sport-Boules
vivre mieux
MACON
Kinder
SPORT
04.10.2009

ALLEMAGNE

ALGÉ

ARGENTINE
29.09.2009

AUSTRALIE
29.09.2009

BELGIQUE
29.09.2009

BOSNIE
HERZEGOVINE
29.09.2009

CHINE
29.09.2009

CROATIE
29.09.2009

ETATS-UNIS
ESPAGNE
29.09.2009

ESPAGNE
29.09.2009

ESTONIE
Auchan
ESPACE
29.09.2009

FINLANDE
ESTONIE
29.09.2009

FRANCE
ESTONIE
29.09.2009

GUINÉE
FINLANDE
GUINEE
29.09.2009

ITALIE
ESPAGNE
29.09.2009

LIBYE
ESPAGNE
29.09.2009

LUXEMBOURG
29.09.2009

MAROC
29.09.2009

MONACO
29.09.2009

MONTENEGRO
29.09.2009

OATIE
ESPAGNE
PAYS-BAS
29.09.2009

RUSSIE
ROATIE
JAPON
29.09.2009

SERBIE
LUXEMBOU
29.09.2009

SLOVAQUIE
ESPAGNE
29.09.2009

SLOVENIE
29.09.2009

SUISSE
29.09.2009

TUNISIE
FINLAND
LUXEM
29.09.2009

TURQUIE
MONTENEGRO
29.09.2009

初めて太平洋を見た時に僕は今の自分の状況を想像できただろうか。
世界を舞台に飛び回ると思っていただろうか。今太平洋を見に行ったらどんな気分になるのだろう。
太平洋には勝てないかもしれない。
でも、スポールブールを通して世界中にファミリーができた。それだけで僕は満足なんだ。

僕は走り続ける。太平洋に勝てると思うまで！